

島立ちに思う

島立ち

甑島には、高校がありません。そのため、甑島の子どもたちは、中学3年生を終えると生まれ育った島を離れ、本土の高校へ進学することになります。

それを甑島では、「島立ち」と呼び、子どもたちを送り出します。

「島立ち」の漢字に「発ち」ではなく、「立ち」という字を当てるのは、「島立ち」が、単に島を離れるということではなく、甑島という故郷を「背負って立つ」、「自立した子どもを地域一帯として育てる」などの意味が込められています。

この特集では、甑島の4つの中学校の生徒や家族にスポットを当て、島立ちに対する思いなどをまとめました。



休校前最後の島立ち



上甑中学校

4月から休校となった上甑中学校の休校最後の卒業式

4月から休校することが決定していた上甑中学校では、3月12日に休校前最後となる卒業式が開催されました。

式では、一人ずつ卒業証書が手渡され、卒業生代表の中尾歩さんが、心を込め作成した手書きの学校新聞「海風」への思いを語り、育ててくれた地域や先生、家族への感謝の言葉を述べました。

式の最後には、在校生を含む生徒全員で校歌を斉唱し、卒業式は静かに幕を閉じました。

学校新聞「海風」の休刊

上甑中学校の休校は、同時に、創刊以来43年間受け継がれてきた学校新聞「海風」の休刊も意味していました。

海風は、校内だけでなく、地域の話題も取り上げ、手書

文章を書くのが苦手な子にはイラストを描いてもらうなど、何らかの形でみんなが取り組めるように工夫して、続けていくうちに、校内のみでのニュースに限界を感じ、おのずと行政や農協にインタビューをするようになり、地域の話題に触れ始めると、その取り組みが評価され、南日本新聞社主催の学校新聞で1席を受賞しました。

それがきっかけとなり、みんなの意識も爆発的に向上したと思っています。私は、ここまで続くとは思っていませんでしたが、記録に残すことのすばらしさ、大切さなど感じています。上甑中学校が休校になって、卒業生の以心伝心で、つづられた文化遺産がここにいづまでも残っていると思っています。



最終号の紙面 (第844号)



上甑中の文化遺産

海風の創刊に携わった当時の教員である瀬戸口正明さんは、こう振り返ります。

「海風は、上甑中学校創立30周年で、子どもたちのために何か残したいという話から発案されました。

私は、学級新聞の作成経験を生かし、当時、全校生徒50人程度の上甑中学校で、生徒全員で参加する学校新聞として取り組みを始めました。

希望に溢れた4人

上甑中学校3年生で最後の卒業生となる4人は、初めての島立ちを経験するとともに、休校前最後の卒業生として、式の日を迎えることになりました。

記念撮影にのぞみ、笑顔を見せる4人の姿は、凛として、上甑の未来を背負い、希望に溢れていました。

